

令和 6 年 9 月 17 日現在

機関番号：15101

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18H00711

研究課題名(和文) 近世日本における諸国東照宮と「神格化」の研究

研究課題名(英文) The Regional Toshogu Shrines and the Deification of Ancestors in the Edo Period

研究代表者

岸本 覚 (Kishimoto, Satoru)

鳥取大学・地域学部・教授

研究者番号：80324995

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、諸国東照宮を中心に近世日本における「国家神」としての東照大権現および東照宮信仰の特徴を解明することを目的とし、三つの研究方法を設定した。第一に、本山 諸国東照宮の基礎構造をあきらかにすることで、これは因幡東照宮を管理する大雲院の史料分析をもとに進めてきた。第二に、大雲院が持つ鳥取藩内の役割を明らかにする。これについては、鳥取藩内の神社・神職の動向とあわせて検討した。第三に、諸藩の祖先神格化との関係や、東アジアにおける「神君」像については、オランダと日本双方でそれぞれシンポジウムを開催し、研究全体を通じて幅広い視野から検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

今回諸国東照宮の事例として取り上げたのは、おもに因幡東照宮別当寺院・大雲院である。全国的にも珍しい膨大な史料群を調査・研究することで、近世日本における東照宮の基礎的な研究が進むことが期待できる。さらに、この成果を研究代表者が進めてきた大名の祖先神格化の問題と結びつけることで、近世日本における「神格化」の問題にアプローチできることを確信した。本研究は、関係諸分野の成果を意識しつつ、また歴史学における新たな研究潮流を踏まえ、東照宮信仰と大名祖先の神格化をあわせた近世日本の「神格化」の特質を大きく前進させたものと考えられる。

研究成果の概要(英文)：In this study, we aimed to clarify the characteristics of the Toshog Dai-Gongen and the Toshogu faith as the "national deity" in early modern Japan, with a focus on various Toshogu Shrines across the country. We established three research methods for this purpose. Firstly, we aimed to elucidate the basic structure of the Toshogu Shrines across the country, based on the documentary analysis conducted by the Daiun-in Temple, which manages the Inaba Toshogu Shrine. Secondly, we sought to clarify the role of the Daiun-in Temple within the Tottori domain. This was examined in conjunction with the trends of shrines and shrine priests within the Tottori domain. Thirdly, concerning the relationship with the ancestral deification in various domains and the image of "Shin-kun" in East Asia, symposiums were held in both the Netherlands and Japan to discuss these topics, providing a comprehensive perspective throughout the entire research.

研究分野：日本史

キーワード：諸国東照宮 神格化

1. 研究開始当初の背景

東照宮研究は、天皇と将軍との関係性や天照大神と東照大権現の神格の問題など政治性・宗教性の観点から議論が深められてきたが、近年においては諸国の東照宮を素材としながらより多様な視点から追求する研究が一つの潮流になりつつある。しかしながら、諸国の東照宮についての研究が進んできたとはいえ、いまだ上野寛永寺・比叡山と諸国東照宮(別当寺)との関係について基礎的な骨格はほとんど検討されておらず、この実証的な作業を行うことなしに近世日本において「神君」家康が果たした「国家神」としての役割を総合的に明らかにすることはできない。寛永寺や比叡山と諸国東照宮(別当寺)がどのような仕組みで、東照宮祭礼や歴代将軍祭祀を実施してきたか、あるいは諸藩が東照宮をどのように位置づけているかが、幕藩政治関係のみならず近世日本の思想や宗教そして政治性を明らかにしていく重要な指標の一つとなる。

さらにこの課題を深めるためには、大名家祖先神格化の研究と結びつけていく必要がある。大名神格化と東照宮信仰と双方の関係を問うことは、東照宮信仰という国家的な性格を持った神が諸国(地域)においてどのような位置づけがなされていたのかを考えることにもなるからである。「神君」家康や歴代徳川将軍を祀ることは、領主権力による地域統治の正当性とも深い関係があり、そのため大名家神格化も視野に入れた総括的な議論が必要なのである。さらにそれを東アジアの宗教的・思想的環境のなかに位置づけてその特質をあきらかにすべき段階にきていると言えるだろう。

2. 研究の目的

本研究では、諸国東照宮(因幡東照宮)を中心に近世日本における「国家神」としての東照大権現および東照宮信仰の特徴を解明することを目的とし、三つの研究方法【A】【B】【C】を設定した。まず、研究代表は、鳥取県内の協力者(県内博物館等の学芸員)らとともに組織的に大雲院・鳥取藩政資料の調査を進め、【A】本山上野寛永寺涼泉院・比叡山との関係を分析し、本山諸国東照宮の基礎構造をあきらかにする。その際、注目していきたいのは比叡山財政の根幹に関わる大山領3000石「朱印」の授受をめぐる寛永寺・比叡山・大雲院・鳥取藩それぞれの役割である。また、因幡東照宮の高い寺格を支えてきた徳川家康の孫にあたる初代大雲院住職公胤や天海との関係については、天台宗史からの専門的な見地から進め、比叡山との関係については研究代表者と研究協力者がともに進める。さらに、国家的な祭祀大系との関係から、東照宮祭礼や歴代将軍祭祀(年忌法要)などの重要行事における諸国東照宮の特徴などについても検討する。これらの基礎的な研究を通じて、寛永寺・比叡山と諸国東照宮との基礎構造が明らかになり、今後の諸国東照宮研究の基盤を打ち立てることができる。

次に、【B】大雲院文書の特性を活かした因幡東照宮と別当寺が持つ鳥取藩内の役割を明らかにし、その地域性・独自性を明らかにする。テーマとしては、まず大雲院の組織(院主や副寺らの役割)と天台宗末寺との関係、そして神領(500石)富安村の支配など大雲院の藩内における基礎的な事実関係を明らかにする。そして鳥取藩政資料を利用しながら歴代藩主祈禱・城内祈禱など鳥取藩に関わる儀礼・祭礼に関わる特徴を明らかにする。また、宗教的な見地から東照宮祭礼や山王神道儀礼を分析し因幡東照宮の特色についても追求する。さらに、東照宮の建築や「宗廟」としての特徴に基づいたアプローチで、江戸期のたび重なる火災で焼失した因幡東照宮の本堂や大師堂の再建をめぐる分析を行い、鳥取藩最大の寺院としての「荘厳」性に注目していきたい。こうした分析を通じて、諸国東照宮のなかににおける因幡東照宮の地域性・独自性を抽出することができる。

さらに、【C】諸藩における祖先神格化と東照宮信仰の関係や、東アジアにおける「神君」家康・東照宮信仰の思想的・宗教的特質を考察していく。これにより、大名家の祖先神格化と近世日本の「国家神」たる東照大権現が諸藩においてどのような位置づけをもっているのかが明らかになり、そして、東アジアの儒学思想的な観点からいかに位置づけられていたのかを多様な視点から検討できる。以上、日光・寛永寺・比叡山のみならず、諸国における東照宮の位置づけや神・儒・仏それぞれの宗教的・思想的視点を組み込んだ構造的な研究が求められており、このなかで本研究では近世日本における「国家神」としての東照大権現の特徴をあらためて浮き上がらせることを目指す。

3. 研究の方法

研究目的を達成するために【A】～【C】の研究方法をもとに5年間を設定し、三つそれぞれの課題を明らかにすべく主要研究テーマと主担当を設定し、それを年次ごとに円滑に行えるよう計画した。全体の研究計画は、史料調査と調査研究を連携させながら進める。史料調査は、研究代表者と研究協力者三名およびアルバイト(学部生・大学院生)三名の組織を中心に、因幡東照宮別当寺であった大雲院文書を中軸に調査を行い、併せて鳥取藩政資料の調査も実施しつつ、史料の撮影・翻刻・データ打ち込みなどを実施する。叡山文庫の滋賀院門跡文書(大山寺文書簿冊215冊)は全体調査を年1回、それ以外に3回の史料調査を計画した。

一方、三つの研究方法の進め方は、まず前中期(2018～2020)に【A】寛永寺・比叡山との関

係を進め、時間を要する【B】鳥取藩域における東照宮は中後半期（2020～22）頃にかけて研究を進めていく。この【A】【B】を踏まえながら、後期（2021～2022）に【C】東照宮と近世日本神格化の特質などに取り組み、研究成果全体をまとめていくこととする。最終的には、東アジアにおける政治権力者の神格化についての研究を共有し、最終年度に国内・国際的な研究集会で総括報告・討議を行い、研究報告と重要翻刻史料をまとめた報告書を作成する。

海外における研究集会の開催については、当初東アジアを想定していたが、日本における思想・宗教研究の盛んな欧米の研究者も視野に入れている。研究報告や論文研究成果は、歴史学に限らず広く国内外の研究者との問題意識の共有化をすることを目指した。

注記〔コロナ禍による研究方法〕

上記の研究方法で進めることを計画していたが、叡山文庫の調査および大雲院での史料調査をコロナ禍で開催することは極めて難しく、限定的にならざるを得なかった。回数を減らし、なるべく鳥取県内のメンバーで実施することで当初の目的をおよそ実現することができた。叡山文庫については実質的には1回の調査にとどまったが、旧『鳥取県史』調査の確認と、今後の見直しはつけることができた。

4. 研究成果

(1) 全体の研究成果

海外におけるシンポジウムの開催（オランダ）

基盤研究（B）「日本近世思想史の見直しと国際共同研究の試み」（研究代表者曾根原理）と共催し、2019年6月3日・4日に"Religion in the Age of the Book: Changing Relations between Shinto and Buddhism in Early Modern Japan"と題し、オランダのライデン大学でシンポジウムを開催した。本科研からは、研究代表岸本覚「神社の鐘は誰のものか：幕末日本における梵鐘の供出と神仏分離」、研究分担者佐藤真人「日本における人神信仰の形成：八幡神を中心に」、同曾根原理「中世神話と近世神話：聖徳太子信仰をめぐる」、山澤学「東照大権現の性格」、同大川真「幕末の尊王思想はなぜ過激主義化したのか：天皇の宗教的権威をめぐる」が研究報告を行い、国内外の研究者との議論を深めた。

シンポジウムを主催（日本）

基盤研究（C）研究代表者朴澤直秀「寺院史料の調査と個別的動向の解明に立脚した近世宗教政策像の更新」と共催してシンポジウムを開催した。

タイトルは、「『大成経』研究の現在」とし、2023年8月27日（日）東洋大学白山キャンパス1号館5階1502教室で行った。本科研からは、のライデン大学でのシンポジウムで報告いただいた二人の研究者を招聘し、研究代表らが趣旨説明と個別報告を実施した。

〔研究代表者・研究分担者〕岸本覚・曾根原理「趣旨説明」

〔招聘研究者〕W.J. ポート（ライデン大学 名誉教授）「『大成経』の研究課題」

〔招聘研究者〕M.M.E. バウンステルス（ライデン大学 講師）「『大成経』の灌伝書・秘伝書-東嶺円慈の神道思想研究の今後の課題-」

〔研究分担者〕曾根原理「天海研究から『大成経』研究へ」

研究成果（著書）

本科研の総括は、岸本覚・曾根原理編『アジア遊学 287 書物の時代の宗教 日本近世における神と仏の変遷』（勉誠出版、2023年8月）にまとめた。本書全体を科研代表者岸本覚と分担者曾根原理で編集し、序文を載せている。これは2019年6月3日・4日オランダ・ライデン大学で行われたシンポジウムおよび、その後の本科研の成果を幅広い研究者に呼びかけて依頼しまとめたもので、本科研の集大成と言っていい成果である。研究代表者および分担者全員の論稿を掲載し、東照宮のみならず、さらに幅広く近世宗教全体に関わって問題提起を行った。

以下は、研究代表者と研究分担者のみの論題を掲げる。

〔研究代表〕岸本覚「因伯神職による神葬祭 諸国類例書 の作成と江戸調査」

〔研究分担者〕山澤学「東照大権現の性格 - 「久能山東照宮御奇瑞覚書」を事例として」

〔研究分担者〕曾根原理「六如慈周と近世天台教団」

〔研究分担者〕曾根原理「二つの神格化」

〔研究分担者〕佐藤真人「人を神に祀る神社の起源 - 香椎宮を中心として」

〔研究分担者〕中川仁喜「東照大権現の本地」

〔研究分担者〕大川真「孝明天皇の「祈り」と尊王攘夷思想」

おもな個別論文（年次順）

岸本覚「神社の「鐘」は誰のものか - 近世後期因幡地域における神仏分離の諸相 -」（『立命館文学』660、2019年）

佐藤真人「The Sea and Food Offerings for the Kami (Shinsen)」、*Edited by Fabio Rambelli "The Sea and the Sacred in Japan" Edited by Fabio Rambelli Bloomsbury, 2018年 Academic*

大川真「尊王攘夷運動と天皇の「祈り」」(『奈良に蒔かれた言葉と思想』、2020年)
岸本覚「近世大名家における菩提寺の形成と展開 鳥取藩を事例として」(『日本仏教総合研究』19、2021年)
曾根原理著・寵娜訳「豊臣秀吉、徳川家康の神格化と“徳川王権論”」(『日本学研究 北京日本学研究中心』32、2021年)
大川真「新井白石の南北朝論」(『奈良に蒔かれた言葉と思想』(公立大学法人奈良県立大学ユーラシア研究センター)5、2021年)
佐藤真人「神仏分離と神社祭祀の変容 - 延暦寺鎮守日吉社の山王祭をめぐって - 」(『北九州市立大学文学部紀要』93、2023年)
Sonehara Satoshi 'Tenkai, Performer of Esoteric Ritual',

(2) 研究成果(総括)と今後の課題

【A】本山上野寛永寺涼泉院・比叡山との関係を分析し、本山 諸国東照宮の基礎構造をあきらかにするとした目的は、現在鳥取県内の研究協力者たちと史料分析まで進行しており、かなりの部分明らかになっている。しかしながら、歴史資料としての近世文書は見通しがついているが、近代宗教史に関わる史料や典籍などを含めるとさらに数万点にのぼるものが残っている。史料は膨大であり、科研開始後も新史料が増加しており、継続的な整理・調査とその論稿化が必要である。今後は3～5年を目標に、順次研究報告や論稿化を進めていく予定である。

【B】大雲院文書の特性を活かした因幡東照宮と別当寺が持つ鳥取藩内の役割を明らかにし、その地域性・独自性を明らかにするとした目的は、【A】と同じく順次進めていく。すでに研究代表者は、鳥取藩内の神社の動向とあわせて成果を公表しているが(2019、2021)、今後はさらに研究協力者にも呼びかけて、継続調査の進行をにらみながら、公開研究会、史料集及び論文集の刊行を進めていきたい。

【C】諸藩における祖先神格化と東照宮信仰の関係や、東アジアにおける「神君」家康・東照宮信仰の思想的・宗教的特質を考察していくという目的は、研究代表者が菩提寺分析のなかで明らかにし(2021)、研究分担者は、総括著書(岸本覚・曾根原理編2023)および個別論文(曾根原理2021、佐藤真人2023、大川真2020)のなかで論じている。とくに、オランダ・ライデン大学の研究者を通じて、オランダと日本双方でシンポジウムを開催できたのは極めて大きな成果であると言える。全体として一冊の著書にまとめたことは、この科研の成果としてさらに今後の研究に資するところは大きい。シンポジウムのなかでは新たな研究動向も示されており、国際的な研究者のネットワークを広げつつ、さらにこのテーマを展開していきたい。

本研究全体の課題としては、コロナ禍の行動制限のなかで史料調査が十分に展開できなかったことである。これはやむを得ないことではあるが、オンラインの限界も見据えた対応方法の検討をあらかじめ準備しておく必要がある。史料が膨大で撮影・整理・分析に時間を要したことも課題である。鳥取県内の研究協力者では限界があり、県外を含めた協力者も検討する必要がある。もっと幅広い研究者との交流のなかで議論が展開される必要がある。この点は、今回の成果を踏まえて、展開していくことを計画している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計15件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 曾根原理	4. 巻 287
2. 論文標題 六如慈周と近世天台教団	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 岸本寛・曾根原理編『アジア遊学287書物の時代の宗教 日本近世における神と仏の変遷』	6. 最初と最後の頁 pp49-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 曾根原理	4. 巻 287
2. 論文標題 二つの神格化	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 岸本寛・曾根原理編『アジア遊学287書物の時代の宗教 日本近世における神と仏の変遷』	6. 最初と最後の頁 pp260-263
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤真人	4. 巻 287
2. 論文標題 人を神に祀る神社の起源－香椎宮を中心として	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 岸本寛・曾根原理編『アジア遊学287書物の時代の宗教 日本近世における神と仏の変遷』	6. 最初と最後の頁 pp189-210
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大川真	4. 巻 287
2. 論文標題 孝明天皇の「祈り」と尊王攘夷思想	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 岸本寛・曾根原理編『アジア遊学287書物の時代の宗教 日本近世における神と仏の変遷』	6. 最初と最後の頁 pp250-259
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中川仁喜	4. 巻 287
2. 論文標題 東照大権現の本地	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 岸本覚・曾根原理編『アジア遊学287書物の時代の宗教 日本近世における神と仏の変遷』	6. 最初と最後の頁 pp211-214
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山澤学	4. 巻 287
2. 論文標題 東照大権現の性格－「久能山東照宮御奇瑞覚書」を事例として	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 岸本覚・曾根原理編『アジア遊学287書物の時代の宗教 日本近世における神と仏の変遷』	6. 最初と最後の頁 pp145-161
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岸本覚	4. 巻 287
2. 論文標題 因伯神職による神葬祭 諸国類例書 の作成と江戸調査	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 岸本覚・曾根原理編『アジア遊学287書物の時代の宗教 日本近世における神と仏の変遷』	6. 最初と最後の頁 pp229-249
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤真人	4. 巻 93
2. 論文標題 神仏分離と神社祭祀の変容－延暦寺鎮守日吉社の山王祭をめぐる－	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 北九州市立大学文学部紀要	6. 最初と最後の頁 pp176-184
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岸本 覚	4. 巻 848
2. 論文標題 「表彰」からみた19世紀の日本社会 鳥取を事例として	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『歴史評論』	6. 最初と最後の頁 pp5-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岸本 覚	4. 巻 19
2. 論文標題 「近世大名家における菩提寺の形成と展開 鳥取藩を事例として」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『日本仏教総合研究』	6. 最初と最後の頁 pp63 - 86
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 曾根原 理著・龍娜訳	4. 巻 32
2. 論文標題 豊臣秀吉、徳川家康の神格化与“徳川王権論“	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本学研究 北京日本学研究中心	6. 最初と最後の頁 pp.65-80
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大川 真	4. 巻 5
2. 論文標題 新井白石の南北朝論	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『奈良に蒔かれた言葉と思想』（公立大学法人奈良県立大学ユーラシア研究センター）所収	6. 最初と最後の頁 pp.19-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大川真	4. 巻
2. 論文標題 尊王攘夷運動と天皇の「祈り」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『奈良に蒔かれた言葉と思想』	6. 最初と最後の頁 pp.15 21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岸本覚	4. 巻 660
2. 論文標題 神社の「鐘」は誰のものか - 近世後期因幡地域における神仏分離の諸相 -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 立命館文学	6. 最初と最後の頁 131-141
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐藤真人	4. 巻 -
2. 論文標題 The Sea and Food Offerings for the Kami (Shinsen)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Edited by Fabio Rambelli "The Sea and the Sacred in Japan" Edited by Fabio Rambelli Bloomsbury Academic	6. 最初と最後の頁 pp.15 ~ 22、202 ~ 3
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計16件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 曾根原理
2. 発表標題 天海研究から『大成経』研究へ
3. 学会等名 基盤研究 (B) 「近世日本における諸国東照宮と「神格化」の研究」 (研究代表岸本覚)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Sonehara Satoshi
2. 発表標題 Tenkai, Performer of Esoteric Ritual
3. 学会等名 2022 The Asian Studies Conference Japan Conference
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岸本 寛
2. 発表標題 近世後期における地域の文化交流～但馬と鳥取のつながり
3. 学会等名 但馬歴史講演会（みてやま地域公開講座 ）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岸本 寛
2. 発表標題 「近世大名家における菩提寺の形成と展開－鳥取藩を事例として」
3. 学会等名 日本仏教総合研究学会第19 回学術大会（オンライン）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 曾根原理・朴澤直秀
2. 発表標題 シンポジウム「作られた近世仏教イメージを見直す」趣旨説明
3. 学会等名 日本仏教総合研究学会第19 回学術大会（オンライン）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 岸本 覚
2. 発表標題 神社の鐘は誰のものか：幕末日本における梵鐘の供出と神仏分離
3. 学会等名 基盤研究(B)「日本近世思想史の見直しと国際共同研究の試み」(研究代表 曾根原理)、基盤研究(B)「近世日本における諸国東照宮と「神格化」の研究」(研究代表 岸本覚)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐藤 真人
2. 発表標題 日本における人神信仰の形成：八幡神を中心に
3. 学会等名 基盤研究(B)「日本近世思想史の見直しと国際共同研究の試み」(研究代表 曾根原理)、基盤研究(B)「近世日本における諸国東照宮と「神格化」の研究」(研究代表 岸本覚)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 曾根 原理
2. 発表標題 中世神話と近世神話：聖徳太子信仰をめぐる
3. 学会等名 基盤研究(B)「日本近世思想史の見直しと国際共同研究の試み」(研究代表 曾根原理)、基盤研究(B)「近世日本における諸国東照宮と「神格化」の研究」(研究代表 岸本覚)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山澤 学
2. 発表標題 東照大権現の性格
3. 学会等名 基盤研究(B)「日本近世思想史の見直しと国際共同研究の試み」(研究代表 曾根原理)、基盤研究(B)「近世日本における諸国東照宮と「神格化」の研究」(研究代表 岸本覚)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大川真
2. 発表標題 幕末の尊王思想はなぜ過激主義化したのか：天皇の宗教的權威をめぐって
3. 学会等名 基盤研究(B)「日本近世思想史の見直しと国際共同研究の試み」(研究代表首根原理)、基盤研究(B)「近世日本における諸国東照宮と「神格化」の研究」(研究代表岸本覚)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐藤真人
2. 発表標題 八幡神の起源と北部九州における八幡信仰の展開
3. 学会等名 伝承文学会研究大会(九州産業大学)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐藤真人
2. 発表標題 神仏習合と精進神
3. 学会等名 日本宗教史懇話会サマーセミナー(長崎歴史文化博物館)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 首根原理
2. 発表標題 徳川家康神格化への道
3. 学会等名 平成30年度春季特別展開連博物館講座(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大川真
2. 発表標題 『読史余論』における南北朝論
3. 学会等名 第11回「歴史の文体」研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大川真
2. 発表標題 18世紀の「朝鮮問題」について 新井白石を中心に
3. 学会等名 日本思想史学会2018年度大会（神戸大学）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大川真
2. 発表標題 江戸時代における年号論
3. 学会等名 西安日本学研究会（西安交通大学）（国際学会）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担 者	曾根原 理 (sonehara satoshi) (30222079)	東北大学・学術資源研究公開センター・助教 (11301)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	中川 仁喜 (nakagawa jinki) (30633482)	大正大学・文学部・准教授 (32635)	
研究分担者	佐藤 真人 (sato masato) (40222020)	北九州市立大学・文学部・教授 (27101)	
研究分担者	山澤 学 (yamasawa manabu) (60361292)	筑波大学・人文社会系・准教授 (12102)	
研究分担者	大川 真 (okawa makoto) (90510553)	中央大学・文学部・教授 (32641)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 SYMPOSIUM Religion in the Age of the Book Changing Relations between Shinto and Buddhism in Early Modern Japan	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 「『大成経』研究の現在」	開催年 2023年～2023年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関